

看護大学4年生が持つ「進路選択の自己効力感」とその影響要因

大川内 鉄二¹, 中島 富有子¹, 原 やよい¹, 窪田 恵子¹

1) 福岡看護大学・看護学部

要約: 本研究では、看護大学4年生が持つ「進路選択に対する自己効力感」とその影響要因を明らかにすることを目的とした。看護大学4年生を対象に質問紙調査を行い、85名の有効回答を分析した。その結果、「進路選択に対する自己効力感」は、学習意欲合計及び下位因子の【主体的学習行動】【実習・演習に対する期待】【小集団学習への適正】との関連が認められた。学習意欲が高い方が、「進路選択の自己効力感」が高い傾向にあった。また、大学外の友人が多い方が、「進路選択の自己効力感」が高い傾向にあった。

看護大学4年生に対して、看護師という「進路選択の自己効力感」を高めるには、学習意欲や学外の友人等が影響因子となることを踏まえ、教育の必要性があると考えられた。

キーワード: 進路選択, 自己効力, 学習意欲, 対人関係

Career Decision-Making Self-Efficacy and Influential Factors for 4th Year Nursing College

Tetsuji OOKAWACHI¹, Fuyuko NAKASHIMA¹, Yayoi HARA¹, Keiko KUBOTA¹

1) Fukuoka Nursing College, Department of Nursing

Abstract: The purpose of this study was to clarify the Career Decision-Making Self-Efficacy of the 4th year students of Nursing University and its influential factors. We conducted a questionnaire survey of 4th grade students of Nursing University and analyzed valid responses from 85 people. As a result, Career Decision-Making Self-Efficacy was found to be related to the total learning motivation and the subfactors [independent learning behavior], [expectations for practical training / exercises], and [appropriateness for small group learning]. Career Decision-Making Self-Efficacy tended to be higher for those with higher learning motivation. In addition, the Career Decision-Making Self-Efficacy tended to be higher when there were many friends outside the university. In order to enhance the self-efficacy of career choices as a nurse, it is necessary to educate the 4th year students of the Nursing University, considering that learning motivation and friends outside the university are influential factors.

Keywords: career decision making, self-efficacy, learning motivation, interpersonal relations

Tetsuji OOKAWACHI

2-15-1 Tamura, Sawara-ku, Fukuoka, 814-0193, Japan

Phone: +81-92-801-0411, E-mail: okawachi@college.fdcnet.ac.jp

1. はじめに

現在、医療は高度化し、在院日数の短縮化、新型コロナウイルス感染拡大などといった環境の変化で、看護師の過重な業務、心理的負担が高まっている。日本看護協会の調査によると、看護師の離職率は高く、2020年度における新卒採用の看護師8.6%、既卒採用の看護師16.4%である[1]。主な離職理由として、看護基礎教育修了時点の能力と現場で求める能力とのギャップが大きいこと、現代の若者の精神的な未熟さや弱さ、看護師に高い能力が求められることなどが挙げられている[2]。

本研究では、「進路選択に対する自己効力感」に着目した。「進路選択に対する自己効力感」は、先行研究[3]によれば、自信不足と負の相関がみられ、進路選択に対する自己効力感が高い者は職業を自分が成長していくために重要なものと考え、低い者は生計を立てるための手段と考える傾向があった。「進路選択に対する自己効力感」は、「進路選択に必要な行動がとれる自信」と関連があると考えられた。自己効力感とは、目標達成に向け必要な行動ができるという自分の可能性の認知であり[4]、本研究において「進路選択に対する自己効力感」を進路選択が適切にできるという認知とした。

医療の状況を踏まえ看護基礎教育で、学生が看護師という職業を選択し、看護師の職業行動がうまく遂行できる自信を持たせることで、離職率を減らすことにつながると考えた。今回、離職率を減らすための対策の基礎資料とするため、看護学生を対象に実態調査を行う。

また、「進路選択に対する自己効力感」に影響するものとして、基本属性とともに、学習意欲、対人関係について調査することとした。本研究では、影響要因の調査項目を抽出する際、Bandura[4]がいう自己効力感の4つの主要な影響要因を参考にした。Bandura[4]は、自己効力感を育てるために、「制御体験」、「代理体験」、「社会的説得」、「生理的・感情的状態が良いこと」を明らかにしている。その中で、「制御体験」は忍耐を要する努力の成功体験を意味し、自己効力感を作り出す最も効果的な方法である。本研究では、看護学生の「制御体験」が学習と考え、学習意欲を調査する。また、同じような立場の人間が努力した成功を見ることで自己効力感が高まる「代理体験」、自信が持てるように話をし言い聞かせる「社会的説得」につ

いては、対人関係として調査したいと考えた。本研究では、まず、学生生活の中で友人との対人関係を調査する。

以上、本研究の目的は、看護大学4年生が持つ「進路選択に対する自己効力感」とその影響要因を明らかにすることである。看護大学4年生の進路選択に対する影響要因を明らかにすることで、進路選択に対する自己効力感を高めるために必要な介入方法を検討することが可能となる。

2. 研究方法

2.1 研究対象者

研究対象は、看護大学4年生105名を対象とした。4年生は、卒業に必要なほとんどの科目を履修し、特に看護学実習11科目(23単位)の履修は修了した時期である。進路選択として、就職試験活動の時期である。

2.2 調査期間

2021年7月に無記名の質問紙調査を行った。

2.3 調査項目

1) 基本属性

年齢、性別、アルバイトの有無、一人暮らしかそうでないかなどを調査した。

2) 進路選択に対する自己効力感

浦上[3]が開発した進路選択に対する自己効力感尺度を用いた。この尺度は、信頼性、妥当性が確認されている。30項目から構成され、非常に自信がある(4点)～全く自信がない(1点)の4件法である。合計点数が30点～120点で、得点が高いほど進路選択に対する自己効力感が高いと評価する。本尺度は職業に対する意識を反映しており、また得点の高い者はより望ましい意識を持っている[3]とされている。

3) 影響要因

対人関係については今回、学内友人数、学外友人数の多さについて調査する。「とても少ない～とても多い」の5件法(1点～5点)とした。

学習意欲について、永嶋[5]が開発した看護学生の学習意欲尺度を用いた。この尺度は、看護教育に特有の実践思考性の高い演習・実習、小集団での課題遂行、看護への興味・関心を含めた看護学生の学習意欲を測定するものであり、信頼性、妥当性が確認されている。30項目から構成され、非常に当てはまる(4点)～まっ

たく当てはまらない (1 点) の 4 件法である。合計点数が 30 点~120 点で、得点が高いほど学習意欲が高い。3 つの下位尺度があり、第 I 因子【実習・演習に対する期待】9 項目 (9 点~36 点)、第 II 因子【小集団への適正】6 項目 (6~24 点)、第 III 因子【主体的学習行動】8 項目 (8~32 点) の 3 因子である。

2.4 データ収集方法

研究について、口頭及び文書で説明した。同意書の署名で同意を確認後、質問紙調査を実施した。授業終了後に時間を設定、4 年生に質問紙を配布した。研究参加の意思がある者のみ記入してもらった。その後に質問紙を個人用の回収用封筒に入れ厳封してもらった。大学内に設置した回収ボックスで回収した。

2.5 分析方法

得られたデータは、Kolmogorov-Smirnov 検定によって正規性を確認し、ノンパラメトリック検定を行った。データ分析として、2 群間の相関には Spearman の検定、2 群間の比較を Mann-Whitney の U 検定を行った。分析は、統計解析ソフト SPSS 25.0J For Windows を用いた。本研究では、ノンパラメトリック検定ではあるが、データをわかりやすく示すために、中央値 (範囲) ではなく、平均値と標準偏差で表した。

2.6 倫理的配慮

研究対象者が所属する大学の口頭及び文書で承認を得た。研究対象者には、研究目的や自由意思での参加であること、匿名性の保持、成績など不利益はないことなどを、文書および口頭で説明した。同意書の署名で同意を確認し研究を実施した。調査は、進路選択に対する自己効力感尺度の使用については、開発者の許可を得た。

本研究は福岡学園倫理審査委員会により許可を得て実施した (承認番号 第 345 号)。

3. 結果

3.1 対象者の概要

87 名よりデータを回収 (回収率 82.9%) した。有効回答は、85 名 (有効回答率 97.7%) であった。

性別は男性が 11 名 (12.9%)、女性 74 名 (87.1%) であった。平均年齢は 21.45 歳 (± 0.70) であった。アルバイトをしている者が 60 名 (70.1%)、アルバイト

をしていない者が 25 名 (29.9%) であった。住居については、一人暮らしでない者 (実家で同居など) が 64 名 (75.2%)、一人暮らしの者が 21 人 (24.7%) であった。

学内の友人については、「とても多い」が 15 名 (17.6%)、「やや多い」が 20 名 (23.5%)、「普通」が 42 名 (49.4%)、「やや少ない」が 8 名 (9.4%)、「とても少ない」と回答した者はいなかった。学外の友人については、「とても多い」が 10 名 (11.8%)、「やや多い」が 24 名 (28.2%)、「普通」が 43 名 (50.6%)、「やや少ない」が 8 名 (9.4%)、「とても少ない」と回答した者はいなかった。

3.2 進路選択に対する自己効力感

進路選択に対する自己効力感尺度 30 項目の合計 (以下、【自己効力感合計】) の平均得点は、 89.6 ± 11.98 点であった。

3.3 学習意欲 (表 1)

学習意欲の合計の平均得点 (以下、学習意欲合計) は、 82.73 ± 10.38 点であった。第 I 因子である、【実習・演習に対する期待】 (以下、実習・演習に対する期待) の合計得点は、 25.49 ± 3.44 点であった。第 II 因子である、【小集団学習への適正】 (以下、小集団学習への適正) の合計得点は、 19.35 ± 2.91 点であった。第 III 因子である、【主体的学習行動】 (以下、主体的学習行動) の合計得点は、 20.20 ± 3.90 点であった。

3.4 進路選択に対する自己効力感と基本属性との関連 (表 2)

性別における【自己効力感合計】は、男性が 90.91 ± 8.79 点、女性が 89.41 ± 12.42 点で有意差は認められなかった。アルバイトにおける【自己効力感合計】は、アルバイトをしている者が 89.70 ± 12.50 点、アルバイトをしていない者が 89.36 ± 10.86 点で有意差は認めら

表 1. 学習意欲の合計平均得点と下位項目の平均得点

項目	mean \pm SD
学習意欲合計	82.73 \pm 10.38
実習・演習に対する期待	25.49 \pm 3.44
小集団学習への適正	19.35 \pm 2.91
主体的学習行動	20.20 \pm 3.90

表2. 進路選択に対する自己効力感と基本属性との関連

項目	項目	得点		P値
		n	mean ± SD	
性別	進路決定に対する自己効力感の合計	男性	11 90.91 ± 8.79	ns
		女性	74 89.41 ± 12.42	
アルバイト	進路決定に対する自己効力感の合計	している	60 89.70 ± 12.50	ns
		していない	25 89.36 ± 10.86	
住まい	進路決定に対する自己効力感の合計	自宅	64 89.02 ± 12.07	ns
		一人暮らし	21 91.38 ± 11.80	

mean±SD: 平均値±標準偏差

p: 有意水準 * : p<0.05

ns: not significant

Mann-Whitney U test

れなかった。

住まいにおける【自己効力感合計】は、一人暮らし以外の者（実家で同居など）が89.02±12.07点、一人暮らしの者が91.38±11.80点で有意差は認められなかった。

3.5 進路選択に対する自己効力感と学習意欲および影響要因との関連（表3）

進路選択に対する自己効力感と学習意欲では、【学習意欲合計】(r=.492)、【実習・演習に対する期待】(r=.482)、【小集団学習への適正】(r=.486)と進路選択に対する自己効力感において、やや強い正の相関がみられ、【主体的学習行動】(r=.279)と弱い正の相関が認められた。進路選択に対する自己効力感が高い者は、【学習意欲合計】、【実習・演習に対する期待】、【小集団学習への適正】、【主体的学習行動】が高い傾向にあった。

進路決定に対する自己効力感と影響要因では、学内の友人の多さと進路選択の自己効力感には相関関係が認められなかった。学外友人の多さと進路決定の自己

効力感に弱い正の相関が認められた。学外友人が多い学生は、進路決定に対する自己効力感が高い傾向にあった。

4. 考察

本研究対象の4年生は、看護師を目指して看護大学に入学し、卒業後も看護師という職業行動の進路選択を行っていく。看護師となった後は、病棟配置希望、認定看護師や専門看護師、大学院への進学など、進路選択が必要とされる。そのため、本研究で明らかになった「進路選択に対する自己効力感」は、先行研究[3]、[6]、[7]などを踏まえると、看護師という進路選択の自信とともに職業行動の自信を示すといえる。田中ら[7]の研究で示されたように看護学生が病院などを比較しながら就職先の絞り込みを行うように、研究対象の4年生は、看護師として働く病院などの進路決定の時期である。就職行動が活発に行えるかどうか、「進路選択に対する自己効力感」が影響すると考えられる。本研究で得られた「進路選択の自己効力感」は、89.60±11.98

表3. 進路選択に対する自己効力感と学習意欲と影響要因との関連

	進路決定に対する自己効力感の合計点	学習意欲合計	実習・演習に対する期待	小集団学習への適正	主体的学習行動	大学生生活の楽しさ	学内友人の多さ	学外友人の多さ
	rs	rs	rs	rs	rs	rs	rs	rs
進路決定に対する自己効力感の合計点	—	.492**	.482**	.486**	.279**	.151	.158	.248*
学習意欲合計	—	—	.838**	.696**	.758**	.229*	.170	.171
実習・演習に対する期待	—	—	—	.664**	.397**	.244*	.129	.182
小集団学習への適正	—	—	—	—	.253*	.244*	.234*	.245*
主体的学習行動	—	—	—	—	—	.106	.063	.004
大学生生活の楽しさ	—	—	—	—	—	—	.607**	.386**
学内友人の多さ	—	—	—	—	—	—	—	.699**
学外友人の多さ	—	—	—	—	—	—	—	—

スピアマンの順位相関係数 *p<0.05 **p<0.01

点であり、看護系以外の女子短期大学生を対象とした先行研究[3]の 81.49±10.77 点より高かった。また、看護大学 1 年生を対象とした先行研究[8]の 85.31±11.67 点より、本研究対象の 4 年生が高い結果であった。本研究対象の 4 年生は、進路選択に、ある程度の自信があると考えられた。先行研究[9]の中には、職業的アイデンティティが上級生になるにつれ低下するという報告があったが、詳細な今後の研究が必要であるものの本研究とは異なると考えられた。研究対象の 4 年生は、卒業に必要な科目の履修をほとんど修了し、11 科目の看護学実習も終えている。これまで、多くの専門的学びを得る機会があった。将来に向けた専門的学びの機会が、進路選択の自信につながったと考えられた。忍耐を要する努力の成功体験である「制御体験」[4]ができた可能性が示唆された。今後は、進路選択の自信を維持し、進路選択行動が活発にできる支援が課題である。本研究で明らかになった学習意欲と大学外の友人との関係から、学習意欲を高め、大学外の友人と交流ができる機会を作ること、進路選択の自己効力感を高める方法につながると考えられた。

「進路選択の自己効力感」と学習意欲との相関関係から、進路選択の自信は、学習意欲で高まる可能性があるといえた。さらに、「進路選択の自己効力感」は、学習意欲尺度における下位尺度【主体的学習行動】【実習・演習に対する期待】【小集団学習への適正】との関連が明らかになっている。看護の専門的な学習に主体的に取り組む意欲があり、実習・演習に対する期待を持って、小集団学習への適正な学習意欲が高い方が、「進路選択の自己効力感」が高い傾向といえた。【主体的学習行動】よりも【実習・演習に対する期待】【小集団学習への適正】との相関係数が高いことから、小集団学習や実習・演習の学習が進路選択の自信につながりやすいと考えられた。先行研究[10], [11], [12]では、学習が自己効力感向上となった結果があり、研究対象の 4 年生が行った学習が忍耐を要する努力の成功体験[4]になった可能性がある。どのような学習が意欲向上となり「進路選択の自己効力感」を高めたのか、今後の研究課題としたい。

進路選択の自己効力感に対する影響要因として、大学外における友人の多さと相関関係があったが、大学内の友人の多さとは関連がなかった。同じ看護師という進路に向けて努力している大学内の友人よりも、異なる進路を目指す大学外の友人が影響する可能性が示唆された。泉澤ら[6]が、看護学生 207 名のデータを分

析し、看護師志望の動機が「経済的安定」が一番多く、「社会性・将来性」「看護師への興味・関心」を合わせて 8 割を占めることを明かにしていた。看護師という職業選択の自信は、社会から見た職業という可能性がある。看護師は、社会の需要が高く認知度が高いことから、大学外の友人との関わりから、進路選択の自己効力感が高められた可能性が示唆された。また、このことは、今後の調査が必要であるが、同じような立場である大学内の友人が努力した成功体験を見る[4]よりも、学外にいる友人の存在が影響したことが推測される。

本研究の結果から、今後、さらに「進路選択の自己効力感」を高めることを目標に本研究を進めていく必要がある。本研究は、調査対象者数が 85 名と少なく一般化するには限界があり、今後も研究を継続する予定である。研究で明らかになったことを基礎資料とし、実習・演習において、学生が主体的に取り組める支援が課題である。

5. 結論

看護大学 4 年生が持つ「進路選択の自己効力感」とその影響要因について、以下のことが明らかになった。

- 1) 学習意欲が高い学生は、「進路選択の自己効力感」が高い傾向にあるといえた。
- 2) 大学外の友人が多い学生は、「進路選択の自己効力感」が高い傾向にあった。
- 3) 看護師という進路選択に必要な行動がとれる自信を高めるために、学習意欲や学外の友人などという影響因子を踏まえ、教育する必要性が示唆された。

参考文献

- [1] https://www.nurse.or.jp/up_pdf/20210326145700_f.pdf, 日本看護協会, 「2020 年 病院看護実態調査」結果 閲覧日:2021 年 12 月 30 日
- [2] <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/04/dl/s0430-7b.pdf>, 厚生労働省, 新人看護職員研修の現状について. 閲覧日:2021 年 12 月 30 日
- [3] 浦上昌則: 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究. 名古屋大学, 42, pp.115-126, 1995.
- [4] Bandura A (1997) :SELF-EFFICACY IN CHANGING SOCIETIES/本明寛, 野口京子監訳: 激動社会の中の自己効力感, 金子書房, 東京, pp.1-35, 2006.

- [5] 永嶋由理子：看護学生の学習意欲の検討，山口県立大学看護学部紀要，5，pp.39-45，2001.
- [6] 泉澤真紀・栗田克実：看護大学生の学習継続のための学習意欲・動機づけに関する研究．保健福祉学部紀要，13，pp.23-29，2009.
- [7] 田中博子，岡潤子，小葉祐子，奥宮暁子，野中史子：選択の生の就職先選択の現状とキャリアガイダンス実施における課題，帝京科学大学紀要，16，pp.53-59，2020.
- [8] 原やよい・中島富有子・窪田恵子：看護学生の学習意欲に影響を及ぼす要因，バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌，20(2)，pp.29-35，2018.
- [9] Takase S, Tsuchiya R, Nishizawa Y: The Influence of Personal Characteristics and Learning Motivation on the Professional Identity of Nursing Students. *Hirosaki Med, J.* 69, pp.66-77, 2019.
- [10] 中西恵理，林有学，須藤聖子，小林智子：基礎看護技術自己学修会への参加が看護学生の臨地実習自己効力感に与える影響：畿央大学紀要，16(2)，pp.51-57，2019.
- [11] 長澤久美子，福岡裕美子，富山ひとみ，小澤公人：老年看護学の授業において TBL(Team-Based Learning)を導入した学習の効果，常葉大学健康科学部研究報告集，6(1)，pp.37-46，2019.
- [12] 太田美帆，西久保秀子，有澤舞，村上希，加藤和子：慢性病患者の食に関する看護実践力を養うアクティブ・ラーニングの評価，東京家政大学研究紀要，59(2)，pp.47-54，2019.



大川内鉄二 (おおかわち てつじ)

福岡看護大学 助教

佐賀大学大学院医学系研究科修士課程看護学専攻修了 修士(看護学)。2021年から福岡看護大学助教。現在，精神科における口腔ケア，看護学生のメンタルヘルスについて研究を行っている。



中島富有子 (なかしま ふゆこ)

福岡看護大学 教授

佐賀大学大学院医学系研究科修士課程看護学専攻修了 修士(看護学)，福岡大学大学院教育・臨床心理専攻博士課程後期満期退学，博士(臨床心理学)。バイオメディカル・ファジィ・システム学会会員。現在，精神科看護師が実践する認知行動療法，精神科看護師が実践する口腔ケアについて研究を行っている。



原やよい (はら やよい)

福岡看護大学 助教

2002年久留米大学文学部人間科学科文学部学士(文学)。2016年福岡大学大学院医学研究科看護学専攻修了 修士(看護学)。現在，精神科における口腔ケア，病院環境が与える心理的影響について研究を行っている。



窪田恵子 (くぼた けいこ)

福岡看護大学 学長

九州芸術工科大学芸術工学研究科芸術工学専攻修了 博士(芸術工学)。福岡大学病院看護師長，西南女学院大学保健福祉学部看護学科教授，福岡女学院看護大学看護学部看護学科教授。

2017年から福岡看護大学学長。